

The Iris Murdoch Newsletter of Japan



No. 1

October, 1999

日本アイリス・マードック学会発足に際して

会長 室谷洋三

日本アイリス・マードック学会の第一回総会及び研究発表会が9月25日に全国から30名余りの方をお迎えして開催され成功裡に終了しましたことを会員の皆様と共に祝いたいと思います。30名という数は決して大きな数ではありませんが、そのお一人お一人がマードックを心から愛している方々で、今後、この方々を核にマードック研究の成果が一段と上がることを祈念致します。

ところでこの記念すべき日を迎えるにつきましたは当然のことながら多くの方の献身的なご努力がありました。マードック学会の結成がはじめて話題になったのは数年前のことですが、はじめは夢物語のようなものでした。それが現実味を帯びてきたのは一昨年あたりからです。そして昨年秋に具体的な提案がなされ、平成10年10月13日に準備会がスタートしました。そして4回の会合の後、同年11月21日に第1回総会・研究発表会開催のための準備会が発足しました。以来毎月1回合計9回の会合を重ねて開催に至ったのですが、その間の準備会のメンバーのご努力を私は直接この眼で見ましたが並大抵のものではありませんでした。マードックはバドミントン校在学中に書いたエッセイ“Unimportant Person”の中で「縁の下の力持ち」の尊さを強調していますが、そのような献身的な努力を惜しまなかった方々にたいして会員一同に代わりまして感謝致します。

さて、本学会の結成を促した理由の一つにマードックご本人の健康状態があったことは否定でき

ません。私共にマードックの体調の異常が伝えられたのは平成8年の秋のことでした。私は翌年の夏、編集を手がけていたマードックの詩集が出版されたのを機にその報告をかねてオックスフォードへお見舞いに行きました。その折りはたしかに以前のマードックとは違いましたが、まだまだお元気でした。それだけに本年2月9日（イギリスでは8日）の早朝、訃報を耳にした時には愕然としました。マードックご本人に本学会の発足の喜びをお伝えすることが出来なかったのは真に残念ですが、学会発足を契機として今後、一層、研究の成果を上げることによってマードックが小説、詩、戯曲などを通してもたらしてくれた恩恵に報いたいと思います。

マードックが逝かれた直後、コソボの悲劇が起こりました。その後、インドとパキスタンで、また最近では東チモールで皆さんご承知のような悲劇が生じました。これらの紛争は国連の介入によって表面的には小康を得ていますが、真の解決にはほど遠い状態です。真の解決は政治や、まして軍事力などによって得られるものではありません。私達が民族や宗教の相違を超えた人間愛を獲得した時に初めて達成されるものです。それは当事者をはじめ私達一人一人が真剣に考えるべき問題です。私は今こそ、マードックの作品を読み、その意図を汲み取り、実践することがますます緊急、かつ肝要なこととなってきていることを痛感します。

この目的を果たすために本学会は10数年前に発足し数々の成果を上げているInternational Murdoch Societyと提携していきます。日本アイリス・マードック学会の発足にあたり同学会のSecretaryのAnn Roweさんからお祝いと励ましのお便りを頂いています。又、*Iris Murdoch: The Saint and the Artist* (1986) の著者であり、マードックのauthorized biographerのPeter Conradi教

授、そしてマードックの夫で彼女の最良の理解者であるJohn Bayley教授からも励ましのお便りをいただいております。このお三方をはじめとして多くの方が本学会の活動に注目し期待されています。本学会が会員の皆さんの熱意と努力によってその期待に応えることが出来る充実した学会となりますよう心より念願してご挨拶と致します。

The Message from The Iris Murdoch International Society

In *The Sea The Sea*, the retired actor/director Charles Arrowby, musing on his past career, reflects in a rather mysterious way that "people were surprised that I was so popular in Japan. But I knew why, and the Japanese knew". The passing thought remains enigmatic, never explained or explored, but the implication that there is some secret affinity between Charles's work and the Japanese consciousness lingers and frustrates the imagination. Iris Murdoch, it seems, could have made Charles's remark, quite appropriately, about herself. The inauguration of the Iris Murdoch Society of Japan, supported as it is with such a splendid array of Japanese scholarship, implies a similar, special affinity between the Japanese and the work of Iris Murdoch.

The "parent" Iris Murdoch International Society, is delighted with the news that Japan is to have its own independent Society. We wholeheartedly

support the forum for philosophical and intellectual debate which this Society will provide. It will cultivate research in Murdoch studies; it will foster the continuation of debate on her ideas, her literature and her philosophy, and will provide a further means of linking Murdoch scholars all over the world.

From Cheryl Bove, the American Editor of the Iris Murdoch Newsletter, and myself, come congratulations and good wishes to you all. We look forward to a long and productive relationship between the two Societies. We also look forward to reading and sharing the intellectual fruits of this very special First Conference of the Iris Murdoch Society of Japan.

With very best wishes.

Dr Anne Rowe
European Editor
The Iris Murdoch Newsletter (UK&USA)

John Bayley 教授から本学会への手紙

When Iris and I came to Japan on a lecture visit for the British Council, now nearly eight years ago, we specially enjoyed our marvelous weekend at Okayama University. At once we felt among friends; and not friends only but discerning readers and admirers of Iris's novels and of her work in philosophy. When we left Japan we continued to keep in touch with the new friends we had made, and especially with Professor Yozo Muroya, a doyen of Iris Murdoch studies, the poet and teacher Paul Hullah, the painter and writer Christopher Heywood, and Professor Neil McEwan, now teaching at Nara Women's University.

That was three years before Iris began to show the symptoms of Alzheimer's disease, the affliction which was to put an end to her creative career. I remember very well the moment when Iris said to me in a sad and puzzled tone that she could not get on with the novel that was to be her last, *Jackson's Dilemma*, because she could not make out who was this mysterious figure of Jackson, nor understand how he had entered her conception of the new novel. I was puzzled and disturbed myself-worried too-as I recorded in the *Memoir* of Iris, and of our life together which has recently been published. It seemed to me after the event that Jackson was a premonitory figure, an omen of her forthcoming illness of which his creator was unconscious at the time,

and whose nature and purpose her mind could not make out.

Almost her last coherent statement before she succumbed to the loss of speech ability which is a cruel aspect of the disease was that she was "sailing into the dark." Sailing perhaps under the dark escort of the last character in all that wonderful pantheon of beings who represent her inimitable achievement as a novelist.

I am still able to look after Iris, sad as her situation now is; and it gives me great pleasure that all she has done in more than fifty years of a great career as writer and philosopher is now being honored by the foundation of the Iris Murdoch Society and especially of the Iris Murdoch Society of Japan, which will be inaugurated under the presidency of Professor Muroya. Most warmly do I wish the Society well; and I know that Iris—modest as she is and always has been about her achievements—would do the same. I honor too those readers and admirers of Iris who have themselves wished to honor her by setting up the Society. By their academic intercourse, and in their meetings and discussions, they will always be finding new aspects of her work in which to rejoice, and which they will illuminate by their continued understanding and appreciation.

The Message From Professor Peter Conradi

Many thanks for your kind letter, dated 14 Jan. and apologies for slight delay in replying.

It is excellent news that the Iris Murdoch Society of Japan has been inaugurated, that you plan a regular Newsletter and indeed a conference.

I know that Iris had a special feeling for Japan. It is apparent in *A Severed Head* where Honor Klein wields the Samurai sword and discourages on power and spirit; in her play *The Three Arrows* with its odd and touching pastiche "Japonaiserie", and — if I am remembering aright, as I write from Wales far from my library, — possibly

also in *The Good Apprentice*. Of an artist in a later work we are told that his work was "understood and appreciated in Japan, with good reason". Could that be Jesse Baltram?

John Bayley is with me and sends his good wishes also. He mentioned that among the last books in which he tried to interest Iris were Tolkien and Lady Murasaki's *Tale of the Genji*, a work she loved, treasured and often praised.

With all good wishes and thanks to you better for all your endeavours.

Yours,
Peter Conradi

第 1 回 大 会 報 告 記

岡 本 糸 美

平成11年9月25日(土)、「第1回日本アイリス・マードック学会」が、川崎医療福祉大学において開催された。まず司会の福永信哲先生より会の発足を喜ぶご挨拶があり、室谷洋三会長が紹介された。会長は学会設立に至る経緯と、国際マードック学会、ベイリー氏、コンラディ氏から、設立を祝す手紙を頂いたことを報告された。会員一同、各方面からの期待の大きさを痛感し身の引き締まる思いがした。続いて各役員の紹介と、理事会及び事務局からの報告があり、昼食、休憩となった。午後からは3つの研究発表と特別講演が行われた。研究発表では、橋本、平井両先生が、異なった観点から共に *Jackson's Dilemma* に言及された。特にご自身も作家である平井先生が「作家」としての視点からこの作品を分析されたのは新鮮だった。アイルランドに造詣が深い河野先生は、『赤と緑』を基にマードックのアンブロ・アイリッシュ性について発表された。マキューワン先生による特別講演は、「哲学の専門家ではない」との前置き

にもかかわらず、幾人もの哲学者に言及したアカデミックなものだった。発表には活発で興味深い質疑応答があり、予定時間を少しオーバーして、発表・講演共に成功裡に終わった。閉会の辞はマードックを「聖少女」と呼ぶ井内雄四郎先生で、来年の再会を願って閉会となった。出席者35名、ささやかではあるが、密度の濃い心温まる学究の場であった。

懇親会は岡山駅西口の「第一イン」で開かれた。神崎謙一先生司会のもと、会長挨拶、乾杯の音頭の後、まずは全員料理に舌鼓を打った。和やかな会話が弾み、植本研介先生が「握手をした時、マードックの手はがっちりとしやがったが、ベイリー氏の手はシュークリームのような感じ」と思い出を語られた。続いてハラ先生がマードックについて書いたご自分の詩を朗読されるなど、予定された2時間は瞬く間に過ぎ、全員来年の再会を約して閉会となった。参加者は25名、家庭的で温かな心が通い合う懇親会であった。

Jackson's Dilemma is Murdoch's Tempest

橋本信子

結婚式の前日にロンドンに現れた束の間の冒険相手のCantorの懇願に負け、関係を終わらせる決心で彼に会ったマリアンは、彼のペースに乗せられ、「結婚できない」という手紙をエドワードあてに書いてしまう。彼女の眠っている間に、結婚式を控えて華やいだ気分でエドワードを囲むベネットとその友人達の所に届けられたその手紙は状況を一変させ、一同を苦悩のどん底に突き落とす。この突然の状況の変化は、ロザリンド、ベネット、ミルドレッドが考えるように、魔法によって引き起こされたようで、シェイクスピアの*Tempest*のプロスペローの魔法による嵐を連想させる。またベネットの召使いのジャクソンがキャリバンに例えられていることから、マードックが*Tempest*を念頭に置いてこの作品を書いたことは明白である。*Tempest*で恋人が試練に遭うように、若者達の恋の前途は容易でなく、結ばれるまでには試練が待っている。手紙が届けられたと知ったマリアンは絶望して死を願うが、嵐で一人の命も失われないように、彼女の命も失われることはない。

弟の溺死を防げなかったことに加え、夫が病気で入院中のアナと密かに結ばれた罪悪感に苦しむエドワード、ナチスのユダヤ人迫害から逃れる際に列車に乗り損ねた妹を見殺しにしてしまった父の幼い頃の話聞き、その重荷を一生背負う覚悟のTuanなど、作中人物は良心の呵責 (remorse) に苦しんでいる。マリアンとロザリンドの父親を任じ、プロスペローにあたるベネットもremorseに苦しみ、自分は無に等しいと考えている。マードックはremorseは人間の苦悩の中で一番恐ろしいものと述べている。

ジャクソンは人々のremorseを癒し、軽減する人物として登場する。ジャクソンはキリストのメタファーとして描かれ、ペテロに3度拒絶されたキリストのように彼はベネットに3度助力を申し出て拒絶される。ジャクソンのベネットに触れる行為はキリストの癒しの行為 (healing touch)、

極度の疲労感に打ちのめされながらふらつくマリアンを支えてCantorの所に連れて行き、彼女を汚辱と絶望から救う行為は贖罪の苦しみ (redemptive suffering) と理解される。その一方で彼にはヒンズー教の神々の要素もある。死の床のティムは、ジャクソンが現れるとヒマラヤの山並みが見え、恐怖も消え去り、永遠の眠りにつく。ジャクソンが両者の要素を併せ持った人間であることを理解しているミルドレッドは、インドの貧しい人々の為に働くという長年の夢を捨て、ロンドンの貧しい人々の為に働き、そこでキリスト教を宣教することを決意するが、彼女の心の中には、キリストもヒンズー教の神々も共存している。ミルドレッドに見られる様々の宗教を受容する姿勢は遠藤周作の『深い河』にも通ずる姿勢である。

ラジオ・オペラ *The One Alone* の中で、天使は囚人にremorseやbitternessしか感じられない無 (nothing) とpainに思えるが、実は喜びに満ちたもう一つの無 (another nothing) があると語る。人間は究極的には無であって、偶然性に支配され死すべき存在であることを認識すれば謙虚になれ、謙虚な人は自己が無であると認職して物事があるがままに見ることが出来、誰よりも善に近いとマードックは述べている。ジャクソンを頑なに拒んでいたベネットが彼を受け入れ、試練を経て結ばれる若者達を見て世代交代の時が来たことを悟り静かな境地に至る過程は、彼が天使の語るanother nothingの境地に至る過程と理解できる。天使が囚人に子供達と共に希望があると語るように、アナの息子ブランはエドワードに良心を覚醒させる重要な働きをする。

マードックは*Tempest*の枠組みを用いて人間関係における許しと和解と共に、種々の宗教を受容をも語っている。寂寥感を感じつつ若者に未来を託し、謙虚に世代交代を受け入れ穏やかな境地に至るベネットに、老齡のマードック自身の感慨が色濃く反映され、この作品はマードック自身の*Tempest*と言える。

マードックのアングロ・アイリッシュ性を求めて

— 『赤と緑』再読 —

河野賢司

ダブリン生まれで両親が Anglo-Irish であるマードックと母国アイルランドとの緊密な関係は、『一角獣』や『海よ、海』における舞台背景や自然描写、さらには『網のなか』『切られた首』『砂の城』などでのアイルランドの登場人物の頻出にも窺える。

マードックの自己認識の出発点を知るうえで貴重な資料は、1939年、彼女が20歳直前（Oxford 大学1年）のときに発表した挑発的な評論「アイルランド人は人間なのか」である。辛辣な逆説を多用したこの大胆な評論は、英国人の傲慢さを厳しく断罪する傍ら、Anglo-Irishの文化的卓越を謳い上げるものであり‘We Irish’という表現にはアイルランドへの傾倒が読み取れる。『赤と緑』は、そのマードックが1965年に発表した唯一の歴史小説であり、錯綜した Anglo-Irish 一族の懊悩が描かれている。

ここで問題となるのは Anglo-Irish の概念規定であり、①血統、②宗派、③言語、④ナショナリズムの4つの視点から、登場人物の言動を再読してみた。

もっとも重要な要素の〈血統〉は、Anglo-Irish 宣言を誇らしげに行うヒルダを除くと、English vs. Irishの単純な二項対立認識に立つアンドゥルーやフランスから、氏より育ちを優先する国籍居住地主義を唱え、「傲慢な貴族階級」と狭義に理解するクリストファーまで、認識に大きな幅がある。また、血を体現する身体的特徴では、大陸ケルト的黒髪のフランスとゲルマン的金髪のアンドゥルーの対照に顕著なように、Anglo-Irish にも様々な民族融合の歴史があり、厳密な系統分類は困難であることが分かる。

宗派はアングリカン（プロテスタント）である。作品にはカトリック改宗者が3人描かれているが、彼らが小説全体のなかで醸し出す異質性は、裏返して言えば、Anglo-Irishの基本的特質としてプロテスタントイズムが依然として有効であることを示す。同様なことは英語使用にも当てはまる。ケルト民族の伝統的遺産のアイルランド語は、ナ

ショナリストの登場人物からも軽視され、英語万能主義に染まった Anglo-Irish の宿命的な知的限界さえ感じさせる。

ナショナリズムを巡っては、英国優位の帝国主義的ヒルダから、革命的選民思想のバット、母性愛から国家そのものを全面否定するキャスリーンいたるまで、多彩な国家観が標榜され、平板な一枚岩ではない。

『赤と緑』は1916年4月の復活祭蜂起を題材としているが、厳密に言えば、その端緒の中央郵便局占拠の時点で筆は擱かれている。靈感の源泉のごとく、詩人イエイツや小説家オコナー、オフエイロンらを創作へと駆り立てたこの出来事をマードックが結末まで描かなかったのは、幼児期の市民戦争（1919-21）の動乱の恐怖感の残滓のせいかもしれない。しかしながら、「人類がかつて築き上げた、もっとも美しい住居」と自ら絶賛するダブリンの街並みを、8日間にわたって克明に記録する長編を国外で執筆したこと、キルケーに模される妖婦 Millie と同根異型の Molly、ドゥメイ家のある Blessington St. とブルームの住む Eccles St. の近接、Martello Tower や Sandycove の岩場の度重なる描写、物語の開始日（ともに16日）の符合などを考え合わせれば、『赤と緑』は、マードックにとっての『ユリシーズ』と呼ぶにふさわしい内実を備えた作品と呼べるであろう。

エピローグを復活祭蜂起から22年後の1938年4月まで一気に転換させたのは、スペイン市民戦争（1936-9）と復活祭蜂起のバラレルな関係—ともに共和主義を実現ないし擁護する、挫折した闘い—を見抜いた炯眼のなせる寓喩的連結である。ファシストの将軍（Francisco Franco）と、復活祭蜂起を弾劾し、戦禍を逃れて渡英した語り手（Frances）の名前が一致するのは偶然ではあるまい。英国とアイルランド、この両国への忠誠心や愛着に股裂きにされた Anglo-Irish たちの、意識下に抑圧された苦悩や葛藤は、同い年に成長したフランスの息子の血管のなかにも、宿命的遺伝として連綿と受け継がれていくのだろう。

The Dilemma of Jackson's Dilemma

平井杏子

主人公ジャクソンは、第一章の終り、48頁目にしてようやく薄闇の中から登場する。光を携えた影、それがジャクソンに与えられた役割である。

彼の出現には、electricity, electric shock, curious attack, flash などの語がつきまとう。ジャクソンとは、エックハルトの〈心の火花〉、クエーカーの〈内的光明〉など、神秘主義的な霊力を付与された人物なのである。彼はまたキャリバンやキムにも例えられている。『テンペスト』や『キム』に対して近年なされてきた反植民地主義的な理解の上にマードックも立っている。作中人物たちはすべて、かつて植民地支配を受けていたか、被抑圧的な立場にあった国籍と関わりをもつ。この作品は『夏の夜の夢』と構成的に似通っているが、両者にはまたインドという共通項もある。ヴェニスという重要なキーワードをこれに重ねれば、恋の仲立ち役であると同時に、東西の多種多様な民族や文化、宗教の交流という象徴的な役割を担うジャクソンの姿が明かになる。

以上のように、主人公ジャクソンには象徴性と観念臭がつきまとうが、しかしこのような人物造型は読者に馴染みのないものではない。これまでも彼と出自を同じくする脇役たちがいた。彼等は一樣に悟りや無の体現者で、人間の苦悩や悔悟や自意識から自由な、作者の哲学的な思考の代弁者であった。共通しているのは、すべてが脇役にとどまり、内面の意識が人間らしいリアリティをもって描かれることがなかったということである。小説的ではないという批判もあったが、しかし彼等が脇役である限り、問題はさほど重要ではなかった。

ジャクソンは作者マードックによって、脇役の座から主役の座に引き出された人物である。だが彼が主人公らしい行動を起すのは、全十三章うちの第六章に至ってからで、彼は失踪したマリヤンの手がかりを求めてフラットに忍び込みベッド

に横たわる。この場面には、作品前半のジャクソンとは違う平凡な人間らしさ、たとえば無力や迷いが描かれるものの、同時に人々の重荷を背負う受難者キリストのイメージや神秘性も混在している。やがて恋の橋渡し役として奔走するジャクソンには、生身の人間らしい身体的な疲労が蓄積するものの、まだ他の登場人物たちのような自我の迷妄や苦悩、後悔や罪悪感からは自由な、非人間的な存在である。だがやがて自分の部屋で眠るマリヤンを発見したとき、ジャクソンは混乱のピークに達し、*Is that wise?* とイタリック体で書かれた自問の台詞によって、彼もついに近代的小説の主人公らしい煩悶を内に抱えることになる。

そして彼は、抽象的な思考の権化ではない、生きた人間であることの証に疲労の極に達し、日頃口にしない酒を飲み眠り込んでしまう。ついには帰宅したベネットに解雇を言い渡されるが、こわれた人形のような機械的な動きで出て行く彼の姿には、『ゴドーを持ちながら』でポッツォーの紐の先につながれたラッキーの姿が重なる。ラッキーとはデカルト的近代知にたいする諧謔であり、マードックもベケット同様、自意識からの解放の不可能性のなかで苦闘するのである。

マードックはかつて内面に神経症的な煩悶を抱えることのない、「自然で単純で善良で謙虚な人間」(「現代文学における自由と徳」1969年)を主人公とした文学の可能性を示唆した。ジャクソンはまさにマードックの望む主役像として作品の中に登場したが、主人公として生き始めるやいなや、内に抱えた人間らしい自意識と煩悶ゆえに、作者によってあらかじめ付与された象徴性と霊力を失わざるを得ない。『ジャクソンのディレンマ』には、主人公ジャクソンのそれと同時に、マードック自身の創作上のディレンマが表出してはいないだろうか。

Iris Murdoch and Plato

Neil McEwan

Platonism in Iris Murdoch is a large subject with many ramifications. The first part of this paper was concerned with Plato as a subject of conversation in the novels. Murdoch characters do not often talk about him. But Plato is such an inspiration in her work that occasions when he is explicitly mentioned attract attention, and, this paper argued, hold our attention too, because talk of this kind has a special resonance.

Many characters refer to Plato occasionally, and they sound on pleasantly easy terms when they do. Readers who are not philosophers may regard Plato as a remote and difficult thinker, but for these speakers he comes to mind as easily and naturally as Shakespeare. The confident and lively tones of voice in which Murdoch's people talk about Plato were explored in passages selected from *The Nice and the Good*, *Henry and Cato* and *The Book and the Brotherhood*.

The Scottish philosopher David Hume distinguished between the philosopher's study and the practical world outside the study door. Talk about Plato in Murdoch belongs outside the study, where lofty ideas mingle with everyday muddle, sometimes with comic, sometimes with poignant results. Attention was drawn to the lightness of touch with which such effects are created in dialogue.

The paper also touched on Murdoch's philosophical essays, showing how the

novelist's imagination and sense of humour enliven the debates she conducts there with Plato, especially in arguing about the value of art. Emphasis was placed on the confident and objective approach to Plato that Iris Murdoch shares with Platonists in the novels.

The last part of the paper mentioned one of Murdoch's younger contemporaries in the field of moral philosophy, the American Thomas Nagel, author of *Mortal Questions*, *The View from Nowhere* and *The Last Word*. A celebrated essay in the first of these books, "What is it like to be a Bat?", indicates that Nagel is a philosopher who shares Murdoch's interest, evident in all her novels, in points of view other than the human (an interest also to be found in Plato). Nagel's defence of objective judgement in *The Last Word* and remarks there about Platonism were briefly summarized and recommended.

The paper ended with some words from a recent memoir by Professor Philippa Foot, who paid tribute to Dame Iris, a friend since student days, as novelist and philosopher.

【A revised version of this paper is expected to appear in the next number of the Journal of the Faculty of Letters of Nara Women's University.】

事務局よりのお知らせ

第2回大会について

平成12年10月7日(土) 川崎医療福祉大学にて開催。研究発表、特別講演、懇親会など計画しています。特別講演など詳細については、後日各会員にご連絡いたします。

下記の要領で第2回研究発表会の発表者を募集いたします。発表テーマに発表要旨(日本語の場合は1200字程度、英語の場合は400words程度)を添えてお申し込みください。

応募資格：日本アイリス・マードック学会会員

発表時間：発表25分、質疑応答5分

締切日：平成12年6月30日

申し込み：発表者の氏名、所属、住所、電話を明

記して、下記あて先まで

〒701-0193

倉敷市松島288

川崎医療福祉大学

橋本信子研究室

日本アイリス・マードック学会

新刊案内

Bayley, John. *Iris and Her Friends - A Memoir of Memory and Desire*. W.W. Norton & Co., 1999.

Bayley, John. *Iris - A Memoir of Iris Murdoch*. Duckworth, 1988.

(アイリス・マードックに関する新刊などの情報を事務局までお寄せくださいますようお願いいたします。)

会計中間報告

総会でご報告いたしました。収入は年会費等で141,600円で、支出は85,657円で、残金55,943円となりました。

総会当日、会長の室谷洋三氏並びに副会長の井内雄四郎氏より当学会に多額のご寄付を頂きました。感謝と共に会員の皆様にお知らせいたします。上記の残金に加えさせていただきます。

なお、平成11年度会費未払いのお方は、速やかにお支払いいただきますようお願いいたします。

会計 森元洋子

編集後記

会員の皆様のご協力により、Newsletter第1号が出来あがりましてお届けします。本号の編集は、記念すべき第1回大会における学術的深さ、会員間の新しい絆、そして学会のさらなる発展の予感を伝えるよう心掛けたつもりであります。ご意見・ご感想などありましたら、編集部までお寄せ下さいませ。

情報とは情を報じると書きますが、Newsletterがマードック研究の情報源であり、しかも会員同志の心の交流の場となることを願っております。

なお、表紙の絵は、マードックの小説に頻出する海のイメージに彼女の名前に因んでアイリスの花をあしらって、スタッフがデザインしたものです。(R.K.)

The Iris Murdoch Newsletter of Japan

No. 1

発行者 日本アイリス・マードック学会

代表 室谷洋三

編集 福永信哲 駒沢礼子

事務局 川崎医療福祉大学 橋本信子研究室

〒701-0193 倉敷市松島288

Tel 086-462-1111 Fax 086-464-1109

日本アイリス・マードック学会会則

- 第1条 (名称) 本会は日本アイリス・マードック学会 (Iris Murdoch Society of Japan) と称する。
- 第2条 (目的) 本会はアイリス・マードックの研究者間の連絡を密にし、研究の推進を計ると共に研究者間の親睦を深めることを目的とする。
- 第3条 (事業) 本会は第2条の目的を達成するために下記の事業を行う。
1. 研究発表会の開催
 2. ニュース・レターの発行
 3. その他、本会の目的達成に必要と認められる事業
- 第4条 (会員) 本会の趣旨に賛同し、所定の会費を納入する者。
- 第5条 (組織) 本会は下記の機関を置く。
1. 会 長 (1名)
 2. 副 会 長 (2名)
 3. 総 会
 4. 理 事 会 (若干名)
 5. 運営委員会 (若干名)
 6. 監 事 (2名)
- 第6条 (会長) 会長は本会を代表して会務を統括し、総会及び理事会を召集する。会長は総会において会員中より選出する。任期は2年とし、再任をさまたげない。
- 第7条 (副会長) 副会長は会長を補佐し会長に事故ある時は代行する。副会長は会長が会員中より指名する。任期は2年とし、再任をさまたげない。
- 第8条 (総会) 本会は毎年1回総会を開く。総会を本会の最高議決機関とする。総会は
- 会長が召集する。定期総会のほかに必要な場合、臨時総会を開くことができる。
- 第9条 (理事会) 理事会は学会の重要事項を提案し、会務の執行を運営委員会にゆだねる。理事は総会において会員中より選出する。任期は2年とし、再任をさまたげない。
- 第10条 (運営委員会) 運営委員会は理事会で会員中より選出する。委員会の委員長は委員が互選する。総会において決定された事業を執り行う。任期は2年とし、再任をさまたげない。
- 第11条 (監事) 監事は会計を監査する。監事は総会において会員中より選出する。任期は2年とし、再任をさまたげない。
- 第12条 (入会及び会費納入) 本会は会費及び寄付金等によって運営される。入会を希望する者は所定の用紙に必要な事項を記入し、会費を添えて事務局に申し込むものとする。
- 附則1. (会則の変更) 会則の変更は総会の議決によるものとする。
2. (International Iris Murdoch Societyとの連携)
本会は第2条の目的達成のために International Iris Murdoch Society と連携する。
 3. 本会は事務局を
〒701-0193 岡山県倉敷市松島288
(電話 086-462-1111)
川崎医療福祉大学 橋本信子研究室
(内線4505) におく。
 4. 本会則は平成11年9月25日より施行する。
 5. 会費は年額4,000円とする。

日本アイリス・マードック学会役員名簿

(敬称略)

- 会 長 室谷洋三 (岡山大学)
- 副 会 長 井内雄四郎 (早稲田大学)、植木研介 (広島大学)
- 理 事 室谷洋三 (岡山大学)、井内雄四郎 (早稲田大学)、植木研介 (広島大学)、高橋和久 (東京大学)、佐々木徹 (京都大学)、福永信哲 (岡山大学)、神崎謙一 (岡山大学)、Paul Hullah (岡山大学)
- 運営委員 福永信哲 (委員長) (岡山大学)、駒沢礼子 (会員)、小野順子 (会員)、橋本信子 (川崎医療福祉大学)、森元洋子 (岡山大学・非常勤)
- 監 事 佐久川豊子 (岡山大学・非常勤)、岡本糸美 (岡山理科大学)
- 事務局 橋本信子 (川崎医療福祉大学)、森元洋子 (岡山大学・非常勤)
- 会 計 森元洋子 (岡山大学・非常勤)